# デジタル時代にこそ　さらに必要となる形態学の重要性

蒲原　幸伸

歯牙形態学の世界に入るにつれて、その情報量が膨大であるが故に入り口を見出せず悩まれている方もいらっしゃるのではないでしょうか。

今回はもう一度基本に戻り、前半では「個々の歯に存在する隆線」、「隆線の成長度合で変化する歯牙形態」など、形態学サイドから歯を追求する楽しさを、後半では「私なりのシェードテイク基本術」をお話しできたらと思います。

「アナログで手掛ける時代ではない」という言葉を頻繁に耳にするようになりましたが、デジタル化が急速に進む時代だからこそ、アナログの技術を組み合わす事で、より良い補綴物を作り出す事ができるはずだと信じています。